



特集号

第96号 2017・1・25

原爆ドーム ユネスコ世界遺産登録20周年記念の集い

核兵器廃絶、世界平和実現へ誓い新たに

被爆と敗戦、世界平和希求の叫びを込めて訴える原爆ドーム。原爆ドームのユネスコ世界遺産登録20周年を記念して、広島ユネスコ協会は、2016年（平成28年）12月11日（日）、広島平和記念資料館メモリアルホール（地階）で「20周年記念の集い」を開きました。集会ではオープニングパ

フォーマンス＜平和の歌＞合唱、原爆ドーム保存事業への基金贈呈式、広島ユネスコ協会 亀井章会長挨拶、平岡敬・元広島市長の「記憶と継承 ～原爆ドームをめぐる～」と題した記念講演をいただき、改めて「核兵器廃絶へ連帯の輪拡大」を固く決意し出発しました。





広島ユ協 会長 亀井 章



今年が間もなく暮れようとしていますが、今年はどんな年だったでしょうか。先日の12月8日は日本がハワイの真珠湾とアジアの国を同時に襲撃して第2次世界大戦・アジア太平洋戦争を始めた75年目の開戦記念日でした。

また、今年には広島原爆被災の71回忌であり、敗戦・終戦の71年目でした。

一方、71年前の1945年、第2次世界大戦の反省から国連の特別機関としてユネスコが誕生し、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人の心の中に平和の砦を築かなければならない」というユネスコ憲章が宣言され、以来、ユネスコは教育科学文化の推進・高揚に努めてまいりました。今日では世界各国の貴重な歴史的文化財の保存と継承のための無形文化財、記憶遺産・記録遺産など様々な分野で遺産認定が行なわれています。

その中で、文化遺産、自然遺産を対象とするユネスコ世界遺産は、一連のユネスコ遺産登録の中で最も歴史があり高い文化価値を擁する事案を登録する制度です。

そもそも世界遺産の始まりは、アフリカのナイル河の工事とエジプト文明の衝突にあります。ナイル河を堰き止めるダム工事が始まって、沿岸のアブシンベル神殿が水没の危機にさらされようとした時にユネスコが立ち上がり、その結果文化財喪失の危機を脱することが出来ました。これを教訓にして世界の文化遺産と自然遺産の保護運動が始まり、1972年にユネスコ世界遺産条約が制定されました。

日本は20年後の1992年、世界遺産条約を批准しました。その前年の1991年に広島市の市長選挙が行われまして、本日の講師の平岡敬さんが市長に当選されました。これは、原爆ドームの遺産登録の実現を“神って”もらえる市長を市民が予め選んだということでしょうか。正に「時に人あり、人に時あり」です。

その後、平岡さんはアジア大会広島開催成功の

ため奮闘される一方、原爆ドームの遺産登録運動の先頭に立たれ、広島市議会決議を経て広島市民、国民の世論を喚起されました。そして医師会や弁護士会、私たちユネスコ協会も加わった遺産登録を求める会が、165万人の署名を達成し、国会請願を行い、採択されました。

そして1996年、ユネスコ世界遺産委員会が開かれ、12月7日、原爆ドームはヒロシマ・ピース・メモリアルとして、厳島神社とともに世界遺産に登録されました。委員会の採決に際して中国とアメリカから異論が提起される事態もありましたが一。

世界遺産認定は厳密な選考基準があります。原爆ドームがクリアした基準はこうです。「顕著で普遍的な価値を持つ出来事、生きた伝統、思想、信仰などと明白な関連をもっているもの」。

原爆ドームは「顕著で普遍的な価値をもつ」つまり“核と人類に関する”顕著な出来事として人類の存亡に関わる文化遺産としての役割と使命が世界に認定された訳です。

現在、原爆ドームは私たちに何を語りかけようとしているのでしょうか。

先ず、広島市民に対しては「核の脅威を発信し、核の使用は許さないことを広島から発信を」と。ユネスコの私達に対しては、ユネスコ憲章の前文にある「人の心の中に平和の砦を築かなければならない」の「平和の砦」の、砦を守るとはどうか、と、問われていると思います。また、日本国民には、戦争はノーよ、憲法第9条を守りなさいよ、と、原爆ドームに向かう時、このような声を聴く思いです。

一方、広島を訪れる観光客はドームにどのように向かわれるのでしょうか。そして、広島は観光客をどのような、おもてなしで迎えているのでしょうか。夜のライトアップで賑わいを演出することでもなさそうに思います、が。

広島のおもてなしとは「人類の大きな過失を顧みて明日の希望の道を考える場を提供する」ことであり、広島がそのような街であること、原爆ドームが人々の心にそのようにアピールできることを心がけたいものです。

原爆ドームが30年後、50年後も人類最後の核の犠牲者であり続けることを願って挨拶を終わります。(全文)

記念講演

記憶と継承 ～原爆ドームをめぐる～

元広島市長 平岡 敬



---【略歴】 ひらおか・たかし---

1927年12月21日生まれ。旧制広島高等学校、早稲田大学第一文学部卒業後、中国新聞社へ入社。記者として広島、韓国の被爆者を取材。同社編集局長を経て、中国放送代表取締役社長。報道機関の要職を歴任し、1991年2月、広島市長選挙で初当選。2期8年（1991年～1998年）務めた。市長在任中に、世界平和のシンボル・原爆ドームのユネスコ世界遺産登録（1996年）に尽力。退任後は、カンボジア支援など幅広く平和活動に貢献している。

原爆ドームが世界遺産に登録されて、20年が経ちました。

それを記念する催しが、広島ユネスコ協会によって開かれたことは、大変意義深いことです。

原爆ドームの世界遺産登録の経緯とその意義については、1997年9月に開かれた広島ユネスコ協会主催の講演会で私が話したことがあり、その記録が1998年1月5日発行の会報にのっていますので、読み返して頂ければ幸いです。

きょうは原爆ドームをめぐる、私の考えていることのいくつかをお話いたします。

一☆「歴史の証人」ドームを忘れるな。被爆者の怒りや憎しみの言葉は、原爆の非人道性を告発している

まず、「世界遺産登録20周年めでたし、めでたし」で終わってはならないということです。この機会に「何のために登録したのか」「何を記憶し、何を伝えていくのか」「原爆の被害はまだ続いている」ということを、もう一度考えてみたいと思います。

あわせて、戦後、原爆ドームを撤去する話があったとき、折りづるの会の子どもたちや、白血病で

なくなった楮山（かじやま）ヒロ子さんをはじめ多くの被爆者から、保存すべきだという声が上がったこと、さらに全国から多額の募金が集まったこと、そして世界遺産登録にあたって政治家をまき込んで、署名活動を中心とする広範な運動があったということ、思い起こさねばなりません。

こうした活動があって、広島悲劇を記憶にとどめ、核廃絶を訴えるシンボルとして原爆ドームは世界遺産となったのです。

そして人類のおかしたおろかな行為を忘れずに、人類の未来に警告を発し続ける「歴史の証人」となっているのです。

一☆「ピカのことは遭うたもんじゃないとわからんよ」。新聞記者時代、激しい言葉を浴びた

私は1952年（昭和27年）に中国新聞社に入りました。そして新聞記者の仕事として、原爆のもたらした現実に取り組んだのは1960年（昭和35年）、戦後15年たった頃です。

私は、1945年8月6日は外地にいたため、原爆を体験していませんが、ピカの時の状況は親戚や友人、知人らから聞いていました。

「お互い戦争ではひどい目に遭ったね」という思いの中での会話でした。それが記者として被爆者と向き合い、被爆体験を読者に伝えるという仕事をする事になりました。

戦後12年たった1957年（昭和32年）に原爆医療法ができましたが、国の援護策は充分ではありませんでした。

朝鮮戦争後、ようやく経済成長へ向かいはじめた社会から取り残された被爆者も多く、結婚や就職差別がある中で、もがき苦しんでいました。

私は原爆投下から2カ月近くたった9月下旬に広島に帰ってきましたので、焼け跡は見ていますが、被爆時の地獄のような惨状は体験していません。

私の筆力の至らなさもありますが、被爆者の話を文字にしても、なかなか話してくれた人の思い、感情を十分に表現することができないのです。

多くの被爆者から「あんたの書いたようなもん

じゃない」「ピカのことは遭うたもんじゃないとわからん」とよく言われました。

そして、自分の思いが伝わらないもどかしさから「もう一ぺん落ちりゃあ分かるんよ」とか「ゲンバクで亭主も殺されたし、わしも死にかけとらあ。何を言うてもどうにもなるもんかい。疲れるだけよ」とか「原爆をアメリカに落としてやりたい」とか、怒りを私にぶっつけてきました。

「あんたは記事を書いて給料をもらうのじゃろうが、わしらには何の足しにもならん。帰ってくれ」と怒鳴られたこともありました。

生活苦や社会の無理解など、彼らの置かれた状況が、このような絶望的な言葉を吐かせたと思いますが、被爆者の体験を聞くというのは辛い仕事でした。

▽こういう激しい言葉は、時がたつにつれて、聞くことが少なくなりました。

原爆援護法ができたり、被爆者を包み込んだ平和運動が広がって、被爆者の苦悩に対する国民的理解が進んだり、また、時の経過が被爆者の怒りや苦しみや悲しみを和らげたのかもしれない。

あるいは、70年代以降、「平和国家」の名の下に、被爆者個人の怒りや憎しみを出しづらくなっている状況が、影響しているものかもしれません。

かつて、被爆者の激しい言葉を聞いた私は、本当にそうなのか、という思いがしてなりません。私が浴びたあの激しい言葉の中にこそ、被爆者の真実の声があり、原爆の非人道性を告発しているのだと思います。

一☆まんが『夕風の街 桜の国』は、人間を無差別に殺傷し、苦しみ続ける原爆の本質をついている

もう一つ忘れてはならないのは、原爆で殺されていった死者の無念をどう受け止めるか、ということなのです。

広島・長崎に投下された原爆は、爆風、熱線、放射線などによって、無差別に市民を殺傷し、甚大な被害を与えましたが、72年たった今でも放射線による後障害が続いています。

毎年、平和記念公園にある慰霊碑に納められている死没者名簿に、新しい名前が書き加えられています。

その人たちは、天寿を全うして亡くなったのではありません。

原爆によって殺されたのです。

それを教えているのは、西区出身のまんが家の、この史代さんが描いた『夕風の街 桜の国』という漫画です。

「夕風の街」は昭和30年代の広島市が舞台です。

まだ、基町の川べりに「原爆スラム」と呼ばれていたバラックが密集し、広島カープの試合に市民が熱狂する時代です。

皆実という名前の主人公の女性は、原爆で生き残ったことの後ろめたさに責められていましたが、白血病と思われる病気で亡くなります。

彼女は死の床でこう言うのです。

<10年たったけど、原爆を落とした人は、私を見て「やった！またひとり殺せた」とちゃんと思ってくれとる？>

このことは老若男女を問わず無差別に殺傷し、戦争が終わった後も放射線によって、人間を苦しめ続け、死に至らせるという原爆の本質を見事に表現しています。

一☆原爆体験は「核兵器は悪である」という概念を生み出した

戦中、戦後を生きた人々には、それぞれの戦争体験があります。

それは戦場での体験、空襲体験、食糧難や学童疎開、勤労奉仕、防空演習や竹やり訓練、肉親の戦死、外地からの引揚げ体験など様々です。ただし、疎開、防空頭巾などの体験を伝えることばが、若い人たちには通じないところに体験継承の難しさがあります。

しかし、戦争が終わったとき、これらの体験者に共通する思いは「もう戦争はごめんだ。二度と戦争はしない」ということでした。

なかでも原爆体験は、人類初の体験であり、その強烈な印象は個々の被爆者の語りを通じて国民に共有され、その集積が国民的体験として結合され、「核兵器は悪である」という普遍的概念を生み出しました。

この思想に基づいて、広島は戦後一貫して核兵器廃絶、世界恒久平和の確立を世界に訴えてきました。

その理想を具体的な形として体現しているのが原爆ドームです。

ドームを見ることによって、私たちは時間の経過に伴って、ともすれば薄れようとする記憶を呼びさまし、核と人間の問題に向き合えます。その記憶は、被爆者の悲痛な叫び、彼らが生きた戦後、死者の声などです。

一☆ドームの世界遺産化へ、米国・中国は反対した

しかし、核時代の悲劇の象徴である原爆ドームに、私たちが認識しているような意義を認めない考え方があります。

1996年12月、メキシコのメリダ市で開かれた世界遺産委員会で、原爆ドームを世界遺産に登録するかどうか、が審議されました。

委員会を構成する21カ国のうち19カ国は賛成したのですが、2カ国が反対しました。

その2カ国とは、米国と中国です。

米国の反対理由は、次のようなものでした。

「米国はこの登録に賛成できない。原爆ドームの申請について、歴史認識が欠けているのではないか、と米国は懸念している。第二次世界大戦を終わらせるために、米国が原爆を使用した。その前段階で、いったい何があったか、それを理解することが、広島悲劇を理解するカギになる。1945年に至る時期のどのような検証も、歴史の正しい前後関係の中でなされるべきだ。米国は、戦争遺跡の登録が、世界遺産条約の範囲外にあると考える」

米国は、これまで一貫して「原爆は戦争を終わらせるために使った。これは正当な行為で、これによって多くの生命が救われた」と主張してきました。

「戦争を終わらせるため」という理由は、今でも多くの米国人が信じていますが、米国人にとっても、誰が考えても、残虐な原子爆弾を投下した非人道的行為の証拠が世界遺産として残ることは、耐えがたいことであつたでしょう。

また、中国代表は、「第二次世界大戦で、アジアでほかにも生命や財産を失って苦しんだ数多くの人々がいる。しかし、今日に至ってもまだ、この事実を認めようとしない人々がいる。今回の広島の登録は、たとえ登録の要件に当てはまるとし

ても、この種の人々が、登録を危険な目的のために利用することがあり得るかもしれない。こういう事態は、世界の平和と安全につながらないと考えるので、我々は今回の決定からはずれる」と言って棄権しました。

中国は、日本の一部政治家の言動をとらえ、日本は原爆被害を免罪符にして、アジアの人たちへの加害責任を免れようとしているのではないかと考えたのです。

米国も中国も、力点は違うものの、日本の「歴史認識」を問題にしたのです。歴史認識とは、あの戦争はなんだったのか、戦後の歩みをどう位置づけるか、ということです。

一☆なぜ今なお、「歴史認識」が問われるのか

「歴史認識」の問題が突きつけられるのは、日本が国として、また日本人一人ひとりが、戦争責任とか歴史認識について、真正面から取り組んでこなかったからではないでしょうか。

先の戦争をどう呼ぶのか。第二次世界大戦、太平洋戦争、十五年戦争、大東亜戦争。

私はアジア・太平洋戦争という言い方が、一番事実在即していると思っていますが、様々な言い方があるということは、それぞれの歴史観によって、呼び方が異なるということです。

つまり、国民の間に統一した呼称が定まっていないので、「先の大戦」と言っています。

これは、日本が戦争責任の問題を極東軍事法廷にまかせて、自らの課題として追及せず、すべてをあいまいにしてきたため、正しい歴史認識ができていないからでしょう。

原爆ドームは単なる戦争遺跡ではなく、私たちの歴史認識のあり方を考えさせ、鍛える存在でもあります。

一☆原爆投下の責任を明らかにすることは、核兵器禁止へ進む第一歩

さて、アメリカではトランプ氏が、大統領になることが決まりました。

まだ彼の政策がよくわかりませんが、軽々には論評できませんが、今のところ、核兵器や世界の核状況に関して強い関心を持っているようには感じられません。

選挙演説で、日本や韓国の核武装を容認するような発言をしていただけに、トランプ氏の真意が気になります。

オバマ大統領は、核問題を重要に考え、核兵器の拡散を防ぐことに力を入れていました。

2009年春、プラハでの演説で「核のない世界」をつくろうと訴え、今年5月、広島でも「核なき世界を追求する勇気を持たなければならない」と言いました。

しかし、一方で、「私の生きている間に、この目標は実現できないかもしれない」と逃げ道をつくり、「核抑止力」を維持するだけでなく、さらに、核兵器の近代化を進めるために、今後100兆円を超える予算を組みました。



オバマ大統領の広島演説は、「71年前、明るく雲一つない朝、死が空から降り、世界が変わってしまった」という言葉で始まりました。

原爆攻撃をまるで自然現象のように表現しました。

誰が落としかつたのか、を言いませんでした。つまり、投下責任に触れることを避けました。

この言葉を、無惨に殺された死者は、どう聞いたのでしょうか。

死者に口が利ければ、「原爆を落としかつたことをどう思うか」と大統領に質したに違ひありません。

日本政府は、オバマ大統領を招くにあたって、「謝罪を求めない」と保障し、広島県知事、広島市長も同じことを言い、とにかく広島に来ることを求めました。

もちろん謝罪を求めても、米国が謝罪をするはずはありません。

「戦争を早く終わらせるため」とか「多くの米

兵や日本人の生命を救った」と正当化するのは、そうでもしなければ、広島・長崎の惨劇を正視することができないからです。

しかし、私は米国は原爆使用の過ちを認めるべきだと考えています。原爆投下の責任を明らかにすることが、核兵器禁止へ進む第一歩だからです。

このことをあいまいにしたままでは、核兵器禁止の理論的根拠が失われるからです。

「謝罪を求めない」とは、こちらが言うことではありません。米国が苦しみ、悩み、自らが考えることです。

一☆米国の国益を優先させるオバマ大統領の核政策

オバマ大統領は演説が上手です。

プラハ演説を聞いたとき、私たちは、米国が先頭に立って核廃絶に向かえば、広島が求めている「核のない世界」が実現するだろう、という明るい希望を持ちました。

しかし、その年の秋、オバマ大統領が新しい予算をつくった時、核兵器関連予算がブッシュ大統領の時の予算に比べて、13%もアップしていることが分かり、私はオバマ政権の核政策を楽観しませんでした。

彼の真意は、核拡散を防ぐことにあり、核を手放そうとは考えていなかったからです。彼は米国の国益を優先していますが、ヒロシマは国の立場を超えて人類の生存を守るべく核兵器廃絶を訴えているのです。

オバマ大統領は、核のない世界をつくろうと努力しているが、米国内の状況、軍産複合体や保守勢力がそれを阻んでいるのだ、という好意的な見方をする人もいますが、政治家は言っただけではダメ。政治家の言葉は実らなければ、ただの作文にすぎません。

せっかく広島に来たのに、原爆資料館をのぞいたのがたった10分ということが、彼の広島訪問のねらいを明らかにしていると思います。

それでも、オバマ大統領の広島訪問を評価する声がありますが、私は米国が原爆投下の責任を認めない限り、核兵器の廃絶はできないと思っています。

そして、米国の軍事、外交政策について知れば知るほど、さらに、原爆投下を決定した当時の国

際情勢や、ルーズベルトやトルーマンの対日観、また様々な米国関係者の当時の発言などを知れば知るほど、オバマ大統領の広島訪問を素直に評価できなくなります。オバマ大統領の人間性に不快感を覚えたことがあります。2001年9月11日に起こった米国同時多発テロの首謀者とみなされたウーサマ・ビンラディンが、2011年5月に米海軍特殊部隊によって射殺された時、オバマ大統領とヒラリー国務長官が手を打って喜んでいる映像が流れました。法治国のリーダーのとる行動ではありません。裁判をしないうで、人権への配慮なしに、口をふさいだのではないかとこの疑問が湧いてきます。

私は、平和公園でオバマ大統領が演説した後、松井広島市長が平和への市民の思いを語るべきであった、と思います。

そうすれば、オバマ大統領の「核のない世界」という訴えが、より強く世界に印象づけられたでしょう。

残念ながら、核廃絶に熱心であるとは思えない安倍首相が長々としゃべったため、オバマ大統領の広島訪問は、日米両首脳の間で政治ショーになってしまったと思います。

一☆安倍首相の真珠湾訪問は政治ショーになりかねない

そして、またもや、政治ショーが始まりそうです。

安倍首相は5日夕方、今月(12月)26日、27日に米国ハワイを訪問する、と発表しました。

1941年12月8日の真珠湾攻撃の犠牲者の慰霊と日米同盟の強化、日米和解の価値を発信する機会にしたいとのこと。

この真珠湾訪問は、オバマ大統領の広島訪問の返礼だ、という見方もありますが、私は、次期大統領に決まったトランプ氏にあわてて会いに行ったことに、オバマをはじめ米国政府首脳が不快感を示したことや、ロシアとの会談を快く思っていないことなど、米国側の安倍不信を払拭するねらいがあったのではないかと、思っています。

同時に、北朝鮮の拉致問題やロシアとの北方領土問題が進展せず、TPPも漂流中です。さらに、アベノミクスも失敗で、いまや原発輸出、武器輸

出、カジノ解禁で景気浮揚を図ろうという国民不在の経済政策をせざるをえないほどの行きづまりを隠すための政治ショーではないか、という思いがぬぐいきれません。

真珠湾で話題をさらい、安倍政権の失政を糊塗しようとしているとの観測も出ています。

一☆日本も戦争被害だけでなくアジアへの謝罪と加害責任の記憶を忘れてはならない

オバマ大統領は、広島に来て、原爆投下について謝罪しませんでした。

安倍首相も謝罪はしないということです。お互い反省はなく、慰霊の形を借りて、同盟強化の政治ショーをくりひろげるのは、死者への冒瀆です。

和解は、お互いに過ちを認めることから始まります。

反省なくして、和解できません。

不平等な日米安保条約・地位協定、沖縄の基地問題、原爆投下責任の問題などを放置したまま、和解をうたうのは、日本の米国従属の一層の固定化につながります。

特に、アジアとの和解を置き去りにしていることが問題です。

中国敵視政策を続けながら、安倍総理はハワイ訪問談話の中で、「日米は世界の平和と繁栄のために共に汗を流してきた」と言っているのは、欺瞞です。

そもそも、原爆投下と真珠湾攻撃は次元の異なる話です。

真珠湾攻撃は軍事目標をねらった攻撃ですが、広島・長崎への原爆攻撃は、無差別に非戦闘員を殺傷し、放射線の後障害がいつまでも続くという、国際法に違反する非人道的行為です。真珠湾と広島は、相殺できる話ではありません。

「未来志向」という言葉や日米の相互訪問で、原爆投下責任と日本の戦争責任の問題をうやむやにしてはなりません。

マオバマ大統領の広島訪問が具体化したとき、「謝罪を求めないのは良いことだ」といわんばかりの空気が広がりました。

私は度量が狭いのでしょうか？

生き残った者、いま安穏な生活を享受している者が、死者の思いをさしおいて、「謝罪を求めな

い」という言葉を口にするに、違和感を覚えました。

近年、広島では「平和」の名の下に、被爆者個人の怒りや恨みを表に出しづらくなっているように思います。言いたくても言えない空気があります。

私たち自身が、「核兵器廃絶の願い」と「核の傘に依存する」ことに矛盾を感じながら、平和・安全保障にかかわる根本問題との対決を先送りしているところに、被爆者が自らの感情を素直に出しにくい状況が生まれているように思います。日本被団協は、2001年に「21世紀被爆者宣言」で米国の謝罪を求めています。そのような声は歓迎ムードの中に埋もれてしまいました。

私たちは核問題について、建前だけで話すのではなく、人間的な感情を取り戻して向き合うべきでしょう。

情念的な怒りや恨みを忘れては、核廃絶への訴えは観念的なものになってしまいます。

被爆者が次第に姿を消して行くときだけに、特にそう思います。

そして、米国の謝罪の問題は、次世代の人たちにとって、大切な被爆体験の継承です。

しかし、この場合、日本もアジア・太平洋戦争で多くの国際法違反の過ちを重ねていることを、思い出さなければなりません。

つまり、被害だけではなく、加害の責任も記憶に留めておきたいと思えます。アジアへの謝罪がない限り、戦後は終わらない。

私たち日本人は、広島・長崎の体験を国民的体験とし、戦争の記憶として心に刻んでいます。戦争の記憶は国によって違います。

米国は、日本の真珠湾攻撃をいつまでも覚えており、中国は、南京での日本軍の虐殺を忘れません。

日本が加害者となった戦争の記憶は、決して愉快なものではありませんが、未来を切り開くためには、原爆の記憶と同様に忘れてはならないものでしょう。

自分たちの過ちを認めつつ、他人の罪を問うのは大変むずかしいことですが、二度と核兵器を使わせないためにも、しなければならないことです。▽現在、世界には1万5,000発の核兵器が存在し、中東、ウクライナ、北東アジアなどでは、核戦争

を誘発しかねないような緊張が高まっています。

しかし、核兵器を禁止しようという動きは確実に高まっています。

国連では、この10月「核兵器禁止交渉の会議を2017年に開催する決議」を123カ国が賛成して採択しました。



核兵器廃絶に向けての大きな一歩です。

ところが、日本は核の傘に依存し続けるため、米国に追随して反対しました。

これまで日本は、核兵器保有国と非核兵器国との橋渡しをする、と度々言ってきましたが、実際にはいつも核兵器保有国の側に立って、米国の代弁ばかりしてきました。

今回は「議決には反対したが、交渉には参加する」ということです。

矛盾した行動ですから、もしかすると、米国の代理人として、交渉の進展を邪魔する役割を果たすのではないかと心配になります。

ここは私たちが、国の動きをしっかりと監視しなければならないところです。

一☆体験の継承は、資料の保存と並んで、音楽、文学、演劇などの芸術文化の形をとることが望ましい、

私はかつて、私たちの課題として、2つのことを言ってきました。

① 被爆体験の継承 ② ヒロシマの思想化

被爆者が老い、その数がだんだん少なくなっていく今、被爆体験の継承とは何か、を考えなければなりません。

被爆者の苦悩に寄り添いながら、被爆体験を研究対象としている広島市立大学平和研究所教授の直野章子さんは、その著書の中で、<「被爆体験

の継承」というときの「被爆体験」とは、被爆者が「再び被爆者をつくらない」という信念を導き出した体験を指す言葉だ」と述べています。

継承されるべき「被爆体験」は、被爆者と被爆者と共に生きた者との共同作業によって作り出されたものであり、継承とは、その理念を次の世代へ引き継ぐことを指すという説に、私は同感します。(直野章子『原爆体験と戦後日本』(岩波書店)より)▽被爆者の証言に依存するだけでは、被爆体験の継承はいずれ立ちゆかなくなります。

先にお話した、この史代さんの描いたまんが『夕風の街 桜の国』は、映画にもなり、様々な人に鑑賞されました。中沢啓治さんが描いた『はだしのゲン』は、英語などいくつもの言語に翻訳され、多くの人たちに読まれています。

私は、ヒロシマの体験の継承は、平和記念資料館の被爆資料の保存と並んで、音楽、文学、演劇、絵画、映像といった芸術文化の形をとることが最も適していると思います。「原爆ドーム」は慰霊、平和祈念、核廃絶への願いをベースに、そのすべてを包み込み、体現した遺跡だと考えています。

体験が結晶して、思想や精神になったとき、それは世代の谷間を越えて行きます。

それだからこそ、体験の風化は避けられないことであっても、原爆ドームを保存する意思を堅持しつつ、私たちは戦争、原爆の記憶を語りついでいかねばならないのです。

建造物を保存することが、自己目的化してはなりません。

▽被害、加害の戦争体験を語りうる世代は、いずれこの世から退場します。

同時に、戦争、原爆の記憶が総体として、薄らいでゆくという現実があります。「戦争はゴメンだ」という声も弱くなりました。

一方で「戦後」を否定する保守主義の台頭もあって、体験や記憶といったものから自由になって、戦争とか戦後を考えようとする傾向が見られます。

さらに、核武装論が公然と論じられるようになった。これはヒロシマの試練です。

▽過去を忘れ、過ぎ去った時間を捨てて行く。それは時には、生きていくための智慧として避けられないことであり、また必要なことでもあり、私たち人間が常々繰り返し行ってきたことです。

したがって、<記憶する>という営みは、決して自然な行為ではなく、努力が必要です。

若い世代が、生まれる前の経験したこともない事柄について、記憶の伝承を引き継いでいくことには、大きな困難が付きまといまいます。

▽忘却が当たり前の人間の日々の営みの中に、忘れたくても忘れることのできない、いや、決して忘れてはならない記憶があります。

その記憶に向き合うには学びの姿勢が必要で、原爆ドームは、私たちにその努力を促しています。

一☆原爆ドームを単なる観光資源にしてはならない

近年、広島観光客がふえています。

原爆ドーム、厳島神社という世界遺産があるからでしょう。

原爆ドームは、保存のため補強工事が施され、昔の生々しさがなくなりました。周囲の景観も整備されています。

しかし、原爆ドームを単なるモニュメントとして、また観光資源としてとらえていると、原爆体験だけではなく、戦争の記憶、加害の自覚、原爆投下責任の追及といった問題を隠してしまいます。

ドーム付近のイルミネーションが新聞記事になったので、見に行きました。私は疑問を抱きました。なぜイルミネーションが必要なのか、飾ることの意味は何なのか、ということです。電飾は原爆の残虐性を見えなくする役割を果たすことになるのではないのでしょうか。

原爆がもたらした罪悪を永遠に思い起させる原爆ドームを通じて、今の世界の核状況に思いを馳せ、原発や日本の安全保障のあり方を考えることが大切です。

そして原爆ドームが存在する限り、米国の原爆投下正当論は正当性を失い、やがて米国の世論も変わるに違いありません。

現に米国の世論調査では、「原爆投下は過ちだった」という意見が、次第にふえてきています。

原爆ドーム世界遺産登録20周年を機に、ヒロシマ以後を生きる私たちは、被爆者の胸の底に秘められた情念と、死者の無念を思い起こすとともに、原爆の非人道性を世界に訴え、その行為の責任を問いつける義務があることを確認して、私の話を終わります。(全文)

**オープニング
パフォーマンス** **<平和の歌> 合唱**

出演 広島ジュニアコーラス
 フェミニンコール広島
指揮：谷千鶴子さん **ピアノ**：加島裕子さん



【曲目】
「平和とは」
「平和と言う
果実」
「群青」
「歌 それは
平和」
— など



原爆ドーム保存へ基金贈呈

絵はがき売上金の一部を広島市へ

「集い」では原爆ドーム保存のための基金を広島市へ当協会が届ける贈呈式を行い、広島市市民局平和推進部平和推進課長へ故高橋昭博さん（元平和記念資料館館長・元当協会副会長）の夫人；高橋史繪さん（協会会員）から目録（20万円）が渡されました。

広島ユネスコ協会は原爆ドーム世界遺産登録記念絵はがき（5枚組セット；別掲記事参照）を1997年発行以来、協会内基金を設定し、これまで（昨年終了）1万部超を頒布・普及。売上げ金を蓄積してきました。この成果は、高橋（同前）さんが生前、広島訪問修学旅行・平和学習の児童生徒を対象に務められた被爆体験証言活動と並行した取り組みによってもたらされました。（広ユ協会長 亀井 章）

原爆ドーム絵はがき（5枚セット）

発行から、普及・販売終了の昨年まで 皆様のご協力に感謝します



←表紙絵（セット袋の表） 四國五郎さん画



㊤ 被爆前の原爆ドーム（広島県産業奨励館）



㊦ 被爆直後の原爆ドーム（要田昭治さん提供）



←現在の原爆ドーム（西山松平さん提供）



↓雪の原爆ドーム



←子どもたちの平和ポスターコンクール(2002)大賞（鶴岡沙織さん・井口台小）